小學修身書

初等科之部

卷二

K110.1
235J
3

K110.1

235J

明治十六年六月印行

小學修身書

文部省編輯局

41276

41276

國立國會圖書館藏書

東京帝國大學圖書之印

穂積重遠藏書

東京帝國大學圖書之印

小學修身書卷之二

第一章

孔子の弟たまひしい父母我を生みたまひて血脈をうけつぐをなれば恩愛のおもたしこと是より大なるいなし憐をそゝぐたまふのこゝろぶ善くても善このれしこと。なけくき教へみちびきた

はゝ。あつき恵み。是より重きいふ。

大和小學

父母あるものゝ出づる時ゝ。必ず父母ふ見えて暇をこひ。行く先を父母ゝ告ぐべし。告げずして。先より先へ行くべゝ。歸りてゝ。先づ父母の前ふ出でて。先ゝて見し聞きし事ふど語りて。父母の心を慰むべし。山野程遠ぐ日し所へ行く共だ。父母ゝけて氣ぢにのひたまふ故。歸りのふど。始め申しゝ時刻を違へざるべし。

日新館童子訓

人の子たるもの。父母の居所。冬ハこのゝたゝ。夏ハ涼しく障子ゆをまを取り開き。庭前までも。奇麗ゝ水そゝぎ。夕暮れゝハ。卧したまふ所。夜具等。安んじたまふ

やうふそをきぐゝよ設け。毎朝其安否をうかゞひ。父母臥したまたゞ。顔色を悦ばせ。聲を和げ。休そたまふやうに告げて。退くべし。同上

子や孫は。其身相應。父母長者の用を辨じ。父母の常にふし給ふをは。言ひ付けをはゞとず。設けをふし。或は父母の方へ客あらば。設け置きたる茶煙草。そをきぐゝよ出ださしめ。父母の言ひ付けよをふとがひ。事をこゝの〳〵。早く辨ずるやうにすべし。同上

親のめし給ふ時は。早く返事して。手ふあるそのも。投げすて。口よあるものも。吐き出だして。そし里行くべし。大和小學

父母のはゞたたき給ひ。鼻ぬぐひ給ふを。人ふ見をぬやうふ。早く掃除をべし。

衣裳あらはるゝ。以そぎ洗濯し。かたゐるびバ。早く縫ひなはを直し。同上

身を以て事ふるふも。言を以て慰むるふも。少しふても。父母の心よさをらぬやうよ。心がくべし。又年老いてをさびしきものあれバ。常ふ側を離をぬやうふを直し。假りにも窮屈ふりなどゝ。思ふべからず。窮屈なりとて。近よらざれバ。癖ふ成りて。窮屈よふるものなり。友だちのやうふ思ひて。寄りそへぞ。又癖よふりて。窮屈ふなきのをふゝぼ。父母の喜び給ふご。嬉しく樂しみふるもなり。和語陰隲録

父母己を悦び愛し給ふをあらバ。身を終いるまで。喜びて忘まず。父母の教誡。又ハ惡み給ふをあらバ。身を終いるま

で。おそれいましめ。聊かも怨むる心あるべからず。日新館童子訓

父母病をもづらひ給ふ時は。かしらの髪々づらず。行くふなりぬりかまはず。戯きごと言はず。琴琵琶をこのず。魚鳥を食らふことも。飽き滿つるまで食らはず。笑ふとも。大口あけず。病ひのことのみを憂へて。他事を投げすて。醫師のはしひき。藥のことはみを勤めとすべし。大和小學

女子は。成長して他人の家へ行きさるべきものなれば。男子よりも。親の教へゆるかせにすべからず。女大學

第二章

兄は父に次ぎて。貴び敬ふべし。起居出

入。衣服飲食。何ふよらず。兄を先ふして。我ごの身を後よし。兄の事を見習ひ。悌順の道をもて。孝養を共ふし。常よ大小ことなく。力を合はせ。兄弟むつましく。父母乃心を歡ばしむるを。務めこそ爲し。よく兄ふ事へて。悖らざるを悌といひ。弟を愛し。むつまじきを友といふ。日新館童子訓

兄い弟を愛し。言ふ所行ふ所。弟の手本

とふるやう。睦ましく教ふべし。弟年ごろふもなくば。身の立つやうにそ爲し。同上

もし又兄の行ひ。道ふ違ふてあらば。熟こいさめ。其あやまちの洩き聞こえぬやうふはゝみ隱して。敬ひ事ふるて。疎にそべこのらば。何事も命よ隨ひ。以ふと思ふてゝ。ひりとも。顏色ふあらはそ爲ての

らば。同上

親に孝し。兄に悌する間い。少しの程に
きば。うかがひこと心得べきことに非ず。夜に
日にはげみて。勤め行ふべし。親に有り
給ひて後い。孝行をなしたく思ふ共も。
爲すべき相手なく。我が年五十六十に
なりぬば。悌の道を行ひたく思ふこと。
其まに成る。兄過ぎ行き給ひて。事ふべき

やうなし。然らば自まゝ親のかごら
へ。兄の存生なる時なれば。嬉しきこと思
ひて。日ををしみ。孝悌をはげすべきこと
なるべや。大和小學

吾が家にある時。父母に孝行なる女い。
よめ入りして後も。かならずおろそかなる
うとめに。能く事ふまつるものなり。我
が家にある時。姉妹と中よくして義あ

きゞよ。先入りして後も。このふゝゞあひよめゞ。能く親しむものなり。是こゝ其行ひをうつして。かはゝぬ道理なるゆゑゝ。かゝるゞ斯くの如くなるこゝなり。

女孝經

第三章

皇國の朝廷い。天照大御神の御皇統ゝして。即ち其大御神の神勅ゝよりて定まらせたまへる所なれゞ。萬々代の末乃世こいへゞも。日月の天にまします限り。天地のかゝらざる限りい。ゞづくまでも。是を大君主と戴き奉りて。畏み敬ひ奉らでい。天照大御神の。大御心ゝかゝひごたく。此大御神の御心ゝ背き奉りてい。一日片時も。立つこゝ能いざるなり。玉匣

大君の御恵みと。今の世の太平乃樂しみと。忘るべからぬ。蓼蟲い辛きをも
らぎ。今の世ふ生まれてい。今の世の樂
しを我。志きる人をくなし。古を思ひや
りて。今の世を樂しむべし。樂訓

筑波祢のふのもかのもりこの君いあき
ご。君ぐみかげふ。ますこのげいふし。古今集

山いさけ。海をあをふむ。世なりこも。君

ふふくごいころ。わきたらめやも。新勅撰集

臣下い。忠節を以て君ふ事ふまつるを。
根本とる。忠い二心ふく。一筋ふ君のた
め乃を思ひ入り。そきぐの職分をよ
く勤めて。我ぐ身を捨て。奉公をる德ふ
り。そきぐの位ふよりて。大小の差別
をあれども。忠の心法い同じをのふ。
翁問答

さて又其國ふ居て。産業をはこめ。生理を少ぐるい。主君の恩德ふる故ふ。扶持を蒙らざれども。臣下こいふなり。其國のおきき法度をよく守り。其職分をよくはこめて。年貢公役を懈怠せば。一心ふ國君をおそれうやまふい。庶人の忠節ふり。同上

第四章

師ふ事ふまつるも。親ふ事ふる如くするものなれば。顔こつこ古玩物やをらかにして事へ。位高く少も。驕る心ふく。威勢ありとも。力を賴まぢ。以つをりよふしはふる志しふく。行ひを正しくをふかふし。ひろくれ教への道を勤め學び。心のはゝしを。聊かも怠るをふ。是弟子たるをの。學文をる大法ふり。大和小學

師匠の前ゝ居るときゝ。何ゝても。物を問ひこの事給たで。其辭の終いるまでは立て。返答申し上ぐ度し。物を習ふときゝ。二たび不審を問ひ返さときゝ。行儀を改めて。うけたまはるべし。同上

道をゆくとき。師匠ゝ行きあひたらば。早く走りさゝみ。正しく立ちて。手をゝまぬき。師匠物をいひこの付給へば。其返答申し上ぐべし。若し何ごものゝまふことふくば。又走りて退きさるべし。同上

第五章

友だちゝ。吾ごゝ心をきくして。隔てふくゝひかはし。正しき善事をゝひ聞かせ導くべし。是を聞き入るゝ友ごゝゝつまでも親しむ度し。もし聞かぬ人と見つけたゝば。必ずまでたちを絶ちて。辱

しめを受くべこのうば。大和小學

友をえらぶ。正直ふしてを曲げて人ふ
從いざるものと交をれば。己ゞ過ちを
聞く。人を愛し。實義ありて多のをしき
行ひあるもの少交いれば。己誠ふをく
む。廣く事を辨へ多るもの我。友とをれ
ば。智を開くなり。是を益友なり。友少
し交をるべし。同上

容貌をかざり。ぜれと其事の見えざる
ゆり。暗ふ人々の氣風ふ合をせ。媚悅を
ふをもの。或い面前ふをい從ひ。退きて
其言をそしるもの。辯舌巧みふ。是非を
紛亂をるもの。是皆損友なり。親しむべ
からず。同上

人と友ふい。先の人乃德を見立て。交
をるべし。かるごゆ忘ふ。我ゞ長ずる所

たりとも。貴き位ありとも。威勢たける兄弟ふどたりとも。其事をこしも鼻ふあてをば。唯先の人の德を敬ひ。入魂すべきなり。若し鼻ふあて驕る心あきば。德ある人。必ず友ふをぬりのなり。同上

第六章

禮い上下の品を分かちて。それぐの禮義あるふ。或い下にして上を犯し。或い上にして下を侮るい節をたゆるの失なりと思ひて。以ましめ禁ずべし。又を人を何ぞも思をばして。犯し侮り。或い人と親しくちふをて。心やをだてふ狎きすぐるも。皆是禮ふかないずを知りて。以はしめ禁ずべし。大和小學

尊者ふ對し。先の言未だ終いらざるふ。我ゞ意を以ひ。或い我ゞ言のをを專ら

こゝ。先の言をよそゝ聞き流し。或い雷同して。一座のもの少。同時ゝこのまびすしく應答し。或い長者を側ゝして。餘人と高談し及ぶの類。皆不遜不敬の事ゝ。誡むべし。日新館童子訓

尊者の前ゝ居るとき。他人來たりて。用事ゝらんと思いば。其座を退くべし。同上

本又い琴琵琶などゝ類ある上をゝいえて通るべゝ。个樣のうつを物あゝば。慎みて跪きゝ。ゝ移して通るべし。大和小學

長者坐を進め。或い物をたまゝふ時。辭をるい不敬あり。常の交いりゝも。座席の高下をたゞめ。辭讓ゝ過ぐるい。却て失禮あり。再び讓りて。先の意ゝ隨ふ。日新館童子訓

年老いたるものと。年若きものと。同じく物を荷ひゆく時は。何をも輕き荷ふらば。老いゐる人の荷を取り。一つふして。若きその一人して持つべし。もし重き荷ふて。一人して持つ所このゝずを。若きもの荷を重くして。少し分このもて。老いたる人ふ持たせべし。大和小學

第七章

客を得てを。奴僕は勿論。犬猫の類ふ至るまで。叱るをあるべこのゝば。食は進むる節。唾をきせぜ。飲食を執るものは。口氣の其品ふ及ばざるやうふをべし。尤も氣を嗅ぐべこのゝば。飲食を執りて進むる間。人問ふをあらば。片向きて答ふべし。唾をきの織をあらんをきらひをあり。日新館童子訓

人とゝゝみ居て。何ゝても食ふ時ハ。飽くまで食たんとをべこのらず。飯をおりて盛るゝも。我ゞ手の。飯ゝ掬れ穢きざるゆゝゝ。多く盛らぢ。おしゝまゝゝ食ふべこのゝず。汁を啜ふゝも。水の流るゝ如くゝ。長く啜ふべこのらぢ。大和小學

物を人ゝ渡をを時。先の人立ちて居るゝハ。我も立ちて渡し。先の人坐して居るゝハ。我も跪きて渡ををのあり。是ハ受け取る人の自由よきためあり。同上

内ゝ物ゝき。むなしき器をのを持つゝも。物の満ちたる器ものを持つ如くゝ。このりと持つべこのゝぢ。内ゝ人ゝき。むゝしき家へをひるゝも。人住む所へをひる如くゝ心得べし。むゝしきをを。斯くの如くをゝ。おむ時ハ。況や満ちたる器も

の人のふ家をや。同上

客とあり。他所へ行き。座敷きへあゞらんとする時。我より先ふ。客二三人もりと見えたるふ。物いふ辭。座敷きの外へ聞ゆる時い。をひるべし。若し密ゑて。人聲聞こえずい。密談をることあるものと心得てをひる屋こゝろぞ。同上

初めより。あけてありたる戸ふれば。我もあけおき。閉ぢてありたる戸を。我のけてをひれば。又元の如く閉づるものなり。それも吾ゞ跡より。又をひる人あきば。閉ぢておきて。皆さす屋こゝぞ。人の屨を脱むべこゝろぞ。人の席をふむべこゝぞ。座ふをきてい。答へ返事の辭をつゝむ屋し。同上

父母ふ孝ふく。兄ふ悌なく。君ふ忠ふく。

師ふ敬なく。友に信なきもの。多少ひ萬卷の書をそらんじ。多能多藝ありとも。何の用をかなさん。人をあなどり。驕慢の心日々に増し。他をそしり。能を誇たみ。或い遊惰ふ日を消し。己をなしいままして。逸樂を思ふといへども。終ふ一生幸せも得ず。憂苦ふ身を沈むるを。自らふせる孽とそいひぶべし。ほこと

に嘆かいしたてまつり。日新館童子訓

0843—18

小學修身書卷之二

定價金六錢一匣

明治十六年五月十一日出板板權所有届

文部省編輯局藏板